

末黒野

すぐろの

2月号（通巻810号）



古
代
米

小川玉泉

名園やもみぢ盛りの花水木
五万本超ゆるコスモス真つ盛り
秋空を映し蹲踞溢れをり
ぎんなんを拾ふにいとまなかりけり

深秋の日差しを翅に赤とんぼ
ひとり酌む酒やまつはる名残の蚊
新米と炊ぎ紅さす古代米
穂田つつむ夕闇町の灯のはるか
みどり濃き魯田一枚峡深く
田仕舞の煙越しなる甲斐の山
敷石の隙間を埋め木の実降る
雲よろふ湖上つぎつぎ雁渡る

オリオン

松本三千夫

三つ目の橋まで土手を秋夕焼
方寸の紙で鶴折る夜長かな
雨脚の見えて音なし今朝の冬
妹山を眠らせ背山大欠伸
オリオンや稿十枚に夜を徹し
冬薔薇の棘に血の珠ルビー色
誰も来ぬひと日山茶花散り急ぎ
産毛ゆたかに冬芽びつしり幣辛夷
冬蝶妹急進四句の消えて色なほ眼裏に
冬麗の富士くつきりと茶毘の朝
収骨の肋骨冬の鷗猛けて
ひとり来てこころ遊ばず冬の海

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

波郷忌

田中臥石

津波碑を訪ふ晩秋の海の音
天然の瓦斯汲む建屋水澄めり
小春日や檀林跡の一位垣
朝空を透く松林椋百羽
波郷忌を迎ふ八ツ手の花芯伸び
月の夜の渡り蟹捕る流し網
亀帰り来よ昼顔の丘枯るる
喪服着る鏡に映る花八ツ手
暖房の車内放送秋葉原
喪の二つ妻と手分けや虎落笛

行く秋

松田泰子

菊咲くや橋とは人を待つところ
穂すすきや川幾曲りして来しや
末枯れて縁うするるふる里よ
秋雨の止めばすぐ田に人の出て
鉦叩たたきて誰を弔ふや
木の実一つ落ちてひろがるしまかな
残菊の雨に開きて雨に伏す
芒野に風の倒るるまでを見る
取れそうもなき柿の実の赤々と
行く秋や翁もわれも杖を引き



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



常磐あけび

岡田史女

新松子

岡野里子

南^さ五^ね味^か子^ず光悦垣をめぐらせて
磐座を抜けきし風や鳥兜
閉店の軒先常磐あけびかな
初冬の並び干さるる甕の数
小春日の百樹の森や子らの声
日だまりや残んの色の冬あざみ
山の端へ日の移ろへり鳩

高西風や赤旗のブイ揺れ止まず
風荒ぶ小島の楡の薄紅葉
切岸を洗ふ白波新松子
天高し割菱著き鬼瓦
色変へぬ臥竜の松や心字池
神鶏の黒き尾の艶実南天
白^{悼 熊切光子様}つくし咲く酔芙蓉雨しとど

小 春 小倉正穂

雁鳴くや友二碑の空雲ばかり
秋深む十七文字を生甲斐に
幸せは計れざるものところ汁
蒼然と古都の樹木や初しぐれ
真珠とも小春に光るややの爪
夜はおでんらしき匂ひに靴を脱ぐ
鯛焼や身より昭和の抜けきれず

初 鴨 加藤静江

初鴨の陣とはならず林泉の池
涸滝てふ岩の造形冷まじや
茶室跡の石柱 四本秋深む
校舎よりブラスのひびき黄落す
乙女らの混じる展帆秋高し
池の綺羅十月桜咲きそろふ
山頂を指呼の花野に憩はれよ

甲斐盆地 菅野日出子

四阿の迫り出す池や蓮は実に
一ト役のすんで静もる葡萄棚
唐破風に光る四つ菱天高し
能殿に金の御幣や秋落暉
あきあかね芭蕉の句碑をよるべとし
神鶏のひそむ木陰や秋時雨
連山に抱かれ霧らふ甲斐盆地

日向ぼこ 菅野蒔子

冬霧や朝の太陽白じろと
むらさきの濃き鉄線の返り花
柿百個剥いて吊して暮れにけり
風呂用の薪割る小春日和かな
涙もてあまし枯野をどこまでも
パトカーのサイレンに覚む霜の朝
クツキーを焼くと決まりぬ日向ぼこ

青炎集

小川玉泉選



横浜 高橋 明

横浜 杉本 裕子

山頂や越後は稲を刈る最中
一步入る河原に匂ふ芋煮汁
刈田昏れ遠き潮騒高まれり
一本に五日かけたり松手入

出不精になりはじめけり菊日和
潮騒に冬立つ音を拾ひけり

横浜 辻井ミナミ

横浜 大滝 敏子

秋袷後姿の妣に似し

養虫は風の意のまま夕映ゆる

天高し武田菱置く青菫

杯上げて甲州の秋惜しみけり

金秋や御幣真中に能舞台

錦秋や山間遠く富士の嶺

角皿の秋刀魚の太く一文字

観覧車降りて仰げり秋夕焼

次つぎと発つ銀翼や秋うらら

磨崖仏に参る階葛の花

雁が音や目鼻分かたぬ磨崖仏

映え渡る日差し櫓の千枚田

ざくろの実染めて日差しの移りけり

特賞の札に納得菊花展

せめてもの髪を切りたし文化の日

よく笑ふ子と居て暮るる小六月

冬満月ゆつくり山を離れけり

またひとり送りし野辺や冬すみれ

横浜 岩上行雄

木犀の香りのしたり何処ならむ
すれ違ひの山の挨拶天高し
山頂や帽子へふはり赤とんぼ
法螺貝を吹く山伏や黄葉山
鐘の音や新蕎麦する夕まぐれ
訃報の夜白きままなる酔芙蓉

横浜 鈴木一恵

稲を刈る一人に山の雲動く
艶やかや北海道の今年米
濃きコーヒー淹るる夕暮棕鳥渡る
ハロウインの南瓜の笑顔門先に
地下鉄の手すりの点字冬ぬくし
灘よりのずしりと重き酒の粕

横浜 青木由芙

べつたら市歌舞伎帰りの客もあて
里山や斜面に見ゆる猪の径
柳散る舳に犬の坐りをり
川鷺の渡る浅瀬や散紅葉
助六を踊る翳間白障子

林道に肩組む猿初時雨

横浜 竹内涼子

干し物の真上蜻蛉のホバリング
秋の蚊と野良猫つき来池の暮
赤とんぼ足湯にはしやぐ男の子
街の灯や明星淡き秋の暮
板前の丁寧に剥き丹波栗
余すなく池面を覆ひ蓮は実

横浜 有賀鈴乃

秋潮のかなた風車の白光る
棹をさすゆるぎ流れや溪紅葉
初紅葉奇岩見上ぐる舟下り
茅厚く葺きし曲家豊の秋
稲架ならぶ民話の里や暮れ初むる
秋冷の杉の参道中尊寺

横浜 嵐 弥生

残照の染むる一群鱗雲
枯山水一隅占むる実むらさき
公園の主めく大樹夕紅葉
雨催ふ池の静寂や散紅葉
素人目にいづれ劣らぬ菊花展
夫の忌や墓碑に縫れる冬の蝶

耕 土 集

松本三千夫選



柿すだれ仏間を暗くしてあたり

ただ夫と見てゐるのみや十三夜

掘り出して芋の親子を別れさす

白旗で片道通す日の短か

店先に大根吊すなんでも屋

新潟 太田チエ子

狭山 沼崎 千枝

静けさや池に色置く初紅葉
二人居の作りすぎたり茸汁

バイオの花買はずに庭の菊を切る

すそわけの大根炊くや出かけぬ日

貼替へたる障子明りやルージユ引く

山霧の池塘をおおふ静寂かな

会津藩の残党めくや藁ほつち

藁塚のドガの踊り子めく甲斐路

夕影や急旋回の掠鳥の群

母の歯に適ふ堅さの柿を選ぶ

横浜 布施由岐子

横浜 清水 元子

寄せ活けの要となりぬ吾亦紅
散り初むる金木犀や夕間暮

海沿ひの鉄路に沿うて花薄

鱗雲人それぞれに荷を背負い

なんとなく出掛けたくなる小春かな

山間や乾く音たつ稲架襖

寝かされて御役御免の案山子かな

産土の新米炊けば艶めけり

青空や五つがほどの木守柿

木屋のかをりまみれや石仏

長田 厚子

石田 朝子

そぞろ寒余白なる老いとほしき
今朝の冬人らやさしく声かけて

サボテンの蕾たわわや小春空

ホットレモン心許せる友とあて

みな逝きて思ひ濃くなる冬夕焼